

# 国 語 科

# 国語科の本質

## 国語科における「21世紀型能力」

### 「国語」で「思考」する

#### 「国語」を使って課題解決を図る

- 目的に合った適切な言語運用能力
  - 課題解決的に言語活動を行う力
  - 言語活動で発揮する想像力・感性
  - 言語感覚・語感
  - 論理的な整合性を判断する
  - 建設的な批判ができる
  - メタ言語能力
  - 多角的な思考力
  - 読解力・聴解力（他者理解力）
  - 話力・記述力（自己表現力）
- 等

## 実践力

- ・自律的活動力
- ・人間関係形成力
- ・社会参画力
- ・持続可能な未来への責任

## 思考力

- ・問題解決・発見力・想像力
- ・論理的・批判的思考力
- ・メタ認知・適応的学習力
- ・情報スキル

## 基礎力

- 言語スキル
- 数量スキル
- 情報スキル

### 「国語」を適切に用いて、他と関わりながら創造的に生き抜く

- 伝え合う力
  - 受容する力
  - 互いにももの見方・考え方を認め、自らのそれを広げ、深める力
  - プレゼンテーション力（説得力）
  - 資料活用・非言語表現活用能力
  - 合意形成力・対話力
  - 言語文化に親しみ、尊重する態度
  - 国語や言語活動への興味・関心
  - 国語を尊重する態度
  - 読書への関心・意欲・態度
- 等

### 道具として「国語」を使う

#### 〈国語の知識・スキル〉

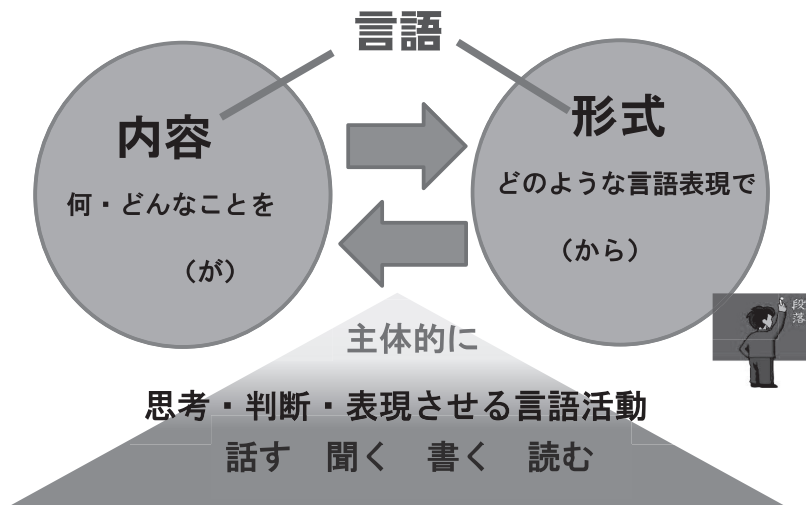
- 話す・聞くスキル（音声言語）
- 書く・読むスキル（文字言語）
- 語彙力（漢字・語句）
- 国語の特質についての認識（文法・言葉の歴史等）
- 書写技能 文字の知識

#### 〈情報スキル〉

- 表・グラフ等の活用も含めたメディアリテラシー
- 等

## 「国語科」の本質

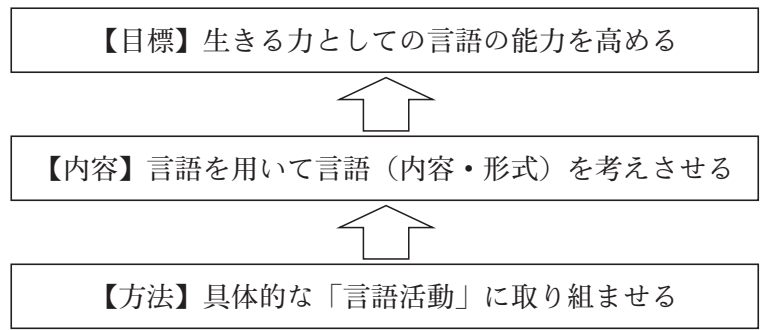
## 言語に関する能力を育成する中核的な教科



【参照】 中学校学習指導要領解説 国語編 9頁

### 1 国語科の本質

国語科の本質は、「言語の能力」を高めることに他ならず、そのため国語科の授業では、言語活動において、言語を大事にしながら言語（内容と形式）について思考・判断し、言語で表現させることが必須である。



### 2 国語科における「21世紀型能力」の捉え

「21世紀型能力」を国語科版（試案）にしたものが左図で、国語科で付けるべき力を列挙し当てはめてみた。概観しただけでも、国語科で付けるべき力は21世紀を生き抜くための必須の力だということがよく分かる。言語が互いのコミュニケーションツールになるということももちろんある。しかし、加えて重要なのは、「言語」が私たち一人一人の根幹である思考や感性を支え、司るということである。中学校3年間の国語の授業を終えた生徒が「国語の時間では言葉だけでなく、生き方までも学んだような気がする」と感想を述べた。言語は生きることと切り離せず、その言語を直接扱う国語科の本質に関わるこの発言には、国語教員として重責を再認識させられた。さて、国語科教育の対象である言語は内容と形式を併せもち、ある文脈における言語について内容と形式とを関連づけながら捉えていかなければならない。国語科において扱う「言語」は母語であり、私たちの一部とっていい。したがって、国語科は「言葉」をベースとした精神性や人間性等、21世紀を生き抜く力に関わっていくことになる。

さて、左図では同心円の内側から「基礎力」「思考力」「実践力」とある。まず、「基礎力」は、漢字が書ける、言葉の決まりが分かる、読み書きのスキルをもっている、辞書が引ける、必要な情報を検索できるなど、運動技能や楽器の演奏技術のように、一定のトレーニングで鍛えられる力である。次の「思考力」は、それら基礎的・基本的な知識及び技能を課題解決や目的達成の必要に合わせて活用する際に発揮すべき、思考し判断し表現する力である。ここには論理的なものや感性的なものも含まれると捉えている。母語が思考と感性の基になっていることからこれは自明のことであろう。そして、最終的に目指すのは「実践力」であるが、国語科の場合には「国語を適切に用いて他と関わりながら創造的に生き抜く力」ということになる。最終的に国語科が目指すべきは、一人一人がどんな状況下にあっても自らの言葉の力を駆使してよりよく生きていけるようにすることである。

### 3 国語科の本質に迫る授業づくり

このように、国語科の授業は「言語（国語）の能力」を高めるために行い、裏を返せば「言語（国語）の能力」を高めなければ国語科の授業とはいえないことになる。ここでいう「言語の能力」とは、左図で「21世紀型能力」として列挙した力を含めた能力であり、具体的には、学習指導要領の各領域等の指導事項として示されている力である。これをバランスよく系統性をもって高めていくことが国語科の使命である。ところが、国語科が扱う言語は幼い頃より自然習得し、ほぼ無意識に用いているため、学習の必要性や高まりを実感させにくい。ペーパーテストで図る力にも限界がある。これがときに指導の曖昧さを招くこともある。「基礎力」だけなら、一方的な講義や繰り返し練習でも一定まで高めることができる。指導もしやすい。しかし、「思考力」「実践力」レベルはそうはいかない。適切な題材等を用いて、具体的な場面や言語活動を設定し、その中で課題解決的に思考・判断・表現をさせなければならない。これが国語科の難しいところでもあり、やりがいでもある。付けるべき力の発揮が要求される言語活動、知的好奇心や感性が揺さぶられる内容、そして、生徒が主体的・協動的に課題解決を図っていくような学習方法を、教材研究段階で十分吟味し、授業として実践していくこと、それが本校国語科の目指す「教科の本質に迫る授業づくり」の土台と考え、授業研究に取り組んでいく。

## 実践事例 1

### 第 1 学年「C 読むこと」の実践

—もう一度読み直すことで作者の意図に気づかせる「読むこと」の授業づくり—

#### 1 単元

「少年の日の思い出」

#### 2 国語科の本質と本実践のかかわり

初読後の感想からは、情景描写や心理描写、登場人物の行動に疑問をもつ生徒が多く見られた。しかしながら、その疑問が作者の意図的なものから発生していたり、主題につながっていたりすることに気付いている生徒は少ない。本実践では、疑問から課題を設定し、解決していくことで、作者の意図や主題が分かってくることを実感させることを目標に指導を行った。文学的文章に限らず、言葉で表現されたものには必ず書いた人の意図が隠されている。書いてあることを額面通りに読み取るだけでなく、その意図に気付かせ、さらに自分の考えを形成することは国語科の本質であると考え。そこで、情景描写や心理描写、キーワード、対比的な表現を手がかりにして課題を解決するために話し合う場面を意図的に設定した。このような学習活動を行う際には、ただ思ったことや気づいたことを述べるだけではなく、なぜそう思ったのか、考えたのか、論理的に説明する必要がある。書いてあることを根拠として、どのような理由付けをして、どのように考えたかを発表し合い、妥当性を議論することが国語科で養うべき力であり、汎用性をもつ力であると考え。

実践力	主人公の生き方、考え方に触れ、人間の生き方について考えようとする態度。
思考力	課題を発見し、設定する力。叙述を基に話し合いを通して、課題を解決する力。
基礎力	文脈の中で言葉の意味を捉える力。伏線的な表現に気付き、登場人物の心情や作者の意図を考える力。情景描写と登場人物の心情を関連させて考える力。

## 3 実践

### (1) 教材について

本教材は、「わたし」と客である「友人」が、現在、語り合う場面（第一部）から始まる。友人は謎めいた言動の後、過去の出来事を「わたし」に語り始める。この第二部では、「僕」（「友人」）がちょうの収集のとりこになっていく様子、隣の家に住む少年（エーミール）とのいやな思い出、エーミールのちょうを盗み、壊してしまったこと、自分の収集していたちょうをつぶしたことが語られる。通常の小説であれば、第二部の次に、現在に戻る第三部が設定され、第一部の謎が明らかになるはずだが、本教材には見られない。額縁小説の体裁をとりながら、現在に戻る第三部がないということになる。そのため、読者は必然的に第一部に戻ることになる。そして、作者によって周到に張り巡らされていた伏線的な表現に気付き、謎が明らかになるという仕組みになっている。また、大人になった「僕」が、過去の出来事を未だにひきずって生きていることも第一部の読み直しで読み取ることもできる。『少年の日の思い出』は、このような読むおもしろさを味わうことができる教材である。

### (2) 単元の全体の流れ（5 時間）

第 1 次 全文を通読し、感想や疑問を出し合い、学習課題を設定する。

第 1 時…全文を通読し、大まかな内容を把握する。

第 2 時…登場人物や場面、視点を整理する。感想や疑問を出し合い、学習課題を設定する。

第 2 次 「僕」の変化を捉え、主題を考える。

第 3 時…課題「『僕』はなぜちょうを盗んだのか。」を考え、「僕」の「あの熱情」を明らかにすることで、ちょうを盗むに至った「僕」の心情を捉える。

第 4 時…課題「『僕』はなぜ自分の収集をつぶしてしまったのか。」を考え、「僕」の変化を捉える。

第 5 時…課題「第一部に隠れている作者の仕掛けを読み解こう」を考え、作者のねらいに迫る。

### (3) 授業の実際

第 1・2 時 全文を通読し、疑問や感想を基に課題を設定していく。どんな疑問や感想でもいいというのではな

く、主題に関わりそうなこと、主題が分かりそうなことという視点で課題を絞っていく。

**第3時** 課題『僕』はなぜちょうを盗んだのか。』を考える。この課題には、「普段なら盗みはいけないとわかっているのに」が隠されていることを意識させる。すると、「僕」のちょうに対する「情熱」を明らかにする必要があることが分かる。「むさぼるような」と「うっとりした」、「激しい欲望」と「微妙な喜び」、「緊張」と「歓喜」等の対比的表現に着目していくと、「僕」のちょうに対する執着とも言うべき「情熱」がわかってきた。

**第4時** 課題『僕』はなぜ自分の収集をつぶしてしまったのか。』を考えた。この課題にも「ちょうをつぶす必要はなかったのに」が隠れている。「ちょう集めがいやになったから。」や「ちょうが嫌いになったから」等の意見が出たが、描写を丁寧に見ていくと、「やみの中で」や「一つ一つ取り出し」、「指で粉々に」といった表現が手がかりになることが分かった。

**第5時** 課題「第一部に隠れている作者の仕掛けを読み解こう」を考えた。第二部の学習を一通り終えた後で第一部を読み直すと、「客」が「もう結構」と言った理由など、最初は分からなかったことが分かるようになっていくことに気がついた。また、「軽い厚紙の箱」や「ピンの付いたまま」といった表現が第二部と関連がありそうなことに気が付いた。これらのことから、第一部には作者の意図が色濃く出ていることが分かった。このことが、第一部が「やみ」で終わり、第二部が「やみ」の中で語られ、「やみ」で終わることが何を意味しているのか考える学習につながった。

## 4 実践に対する振り返り

### (1) 生徒の疑問や感想を生かした課題設定と学習活動

本単元では、第1時の通読後に登場人物や場面、視点を整理しながら、感想や疑問を出し合い、学習課題を設定した。これまでの学習で、小説では登場人物がどのような人物であるかを押さえること、時間の流れや舞台と

なる場所を把握すること、誰の視点で語られているかを確認することなどを学んでいる。そのため、感想や疑問もこれらのポイントから生まれてくる。また、主人公の変化が主題と深く関連していることも学んでいるため、主人公がどのように変わったのかという視点ももっている。これらの既習事項を生かしていくと、どのような疑問や感想が課題になっていくか、生徒たちは理解しているようである。また、自分たちでつくった課題であるため、学習意欲も高く保たれ、学習の流れも把握しやすくなる。

### (2) 文章表現に込められた作者の意図につなげる。

生徒が課題を解決していくという流れで学習活動を設定したが、必ず作者の意図を考えさせるようにした。たとえば、第5時では次のような学習活動を行った。

#### ○「わたし」の設定

- ・「末の男の子がおやすみを言った」「子どもや幼い日の思い出について話し合った」から、二人とも同じような年齢であることが推測される。
- ・過去にちょう集めをしていたところが「友人」と同じ。
- ・「軽い厚紙の箱」は、「友人」の昔の「古いつぶれたボール箱」とよく似ている。

ここから作者のどんな意図が考えられるかという問いに対して、「わたし」と「友人」が同じような年齢で、同じような境遇で過去にちょう集めをしていたのは、偶然ではなく、「友人」が過去の話話を話しやすくするための布石ではないかという意見が出された。本教材は第二部を読み終えた後、本来あるはずの第三部がないことから、第一部に戻って読ませるという作者のねらいがよく分かる教材である。そして、読み返すことで伏線的な表現に気付かせるという巧みな仕掛けが施されている。生徒に気付かせる学習活動を仕組むことで、意欲的な学習につなげることができた。

このように伏線的な表現や情景描写等に作者の意図が含まれていることを意識して読むことは、作者の考え、主題をつかんで読もうとする態度につながる。さらに、読み取ったことに対して自分の考えをもつという、主体的に読む態度を育てることにつながるのではないだろうか。

## 実践事例 2

### 第3学年「A話すこと・聞くこと」の実践

#### 一「瞬発的な思考・判断・表現」に働く「メタ認知力」を高める「聞くこと」の授業づくり

#### 1 単元

聞かれてうれしい 聞いてうれしい インタビュー  
— 対談の中で相手の話を引き出す —

#### 2 国語科の本質と本実践の関わり

学習前、生徒の多くが「聞くこと」は気楽で容易な行為と認識していた。そこで、本実践では「聞く」ことを「瞬発的な思考・判断・表現」と「責任」が伴う能動的な行為と捉え、次のような姿を目指して指導を行った。

- その瞬間にその場で、相手が伝えている内容、また直接表現されない思いや考えまでを的確に聞き取る姿
- 相手を尊重し、より豊かに相手の内面を引き出す質問をしながら対話を展開していく姿

こうした姿の実現には、刻々と進む不可逆的な音声言語活動の中で、相手を的確に受け止め、次の瞬間のふるまい方を「瞬発的に思考・判断・表現」することが求められる。また、それを適切に行うには、外にいるもう一人の自分が、渦中にある「聞き手」としての自分を、目的（内面を引き出す）や状況（相手の発話や表情、対話の所在地、雰囲気）に照らして評価・調整する「メタ認知」が必要となる。これらの力を育てることはまさに言語の能力を鍛えるべき国語科の本質である。

実践力	人間関係形成力 相手を尊重しながら、相互理解を図る
思考力	自分の聞き方をメタ認知する
基礎力	相手の話を適切に聞き取り理解する

こうした考えから、「聞き手」と「聞かれ手」の立場を分けた対話、事前に質問を準備してメモ帳を構える一問一答式の「情報収集型」ではなく、「聞かれ手」のものの方・考え方に迫る「内面発掘型」の対話に取り組ませた。「聞き手」は表向きには主役ではないものの、「聞かれ手」を支え、引き出しながらどう展開するかは、

「聞き手」（＝自分一人）の瞬発的な思考・判断・表現にかかっている。また、「聞き手」のありようの良し悪しは「聞かれ手」が心を開いて語り出したり逆に困惑したり、何らかの反応として返ってくるため、「聞き方」を瞬発的に認知しやすい。

#### 3 実践

##### (1) 単元の全体の流れ（全5時間）

- 第1時 テレビで放映された対談番組を視聴し、取り組む活動への具体的なイメージや願いをもつ。
- 第2時 対話を実際に行ったりそれを観察したりし、その際の悩みや気付き等から学習の課題を設定する。
- 第3・4時 対話モデルから、聞き方のコツを考える。
- 第5時 対話に再挑戦する。学びを振り返りまとめる。
- 課外 沖縄での修学旅行で現地の方から平和への思いを聞き取る。

##### (2) 授業の実際

- 第1時 ①アンケートに答えることで、聞き手としての自分を見つめ直す。②テレビ番組の一場面を視聴し、対話のよさを感じたり取り組む活動に見通しをもったりする。また、感想を述べ合い、興味をもって聞く、目を見る、うなづく等、小学校の既習のレベルを確認する。③この学習が生かせる実生活の場面（友達の悩みを聞く、高校で新しい友達を作る、職場の上司と会話を続ける等）を考え発表する。付いた力を活用している自分の姿を想像させることで、この学習の必要性を意識させる。
- 第2時 全員が校内の教員を相手に約1分半、内面発掘型の対話に挑戦する。（次の①～④の順に各々が活動し⑤は全員で行う）

- ①自分の対話前に友達の聞き方を観察する。（→心を準備し、見通しとめあてをもつ）



- ②友達2名に観察されながら教員と対話をする。
- ③自分の対話後に友達の聞き方を観察する。(→課題を踏まえ、批評的に観察、友達から学ぶ)
- ④先ほど終えた対話を想起し、その際「聞き手」をした自分のアタマの中を分析してワークシートに書き込む。
- ⑤全員で感想や学習の課題を発表し合い、シェアする。

**第3時** 生徒A(教師が選んだ「聞き手」と生徒B(生徒Aが話を聞きたい相手に選んだ「聞かれ手」)による、その場で行う対話モデルから、相手に気持ちよく話してもらい聞き方を見付け、その効果を考える。その後、見付けたコツを生かして隣の人と交替で対話をする。

**第4時** モデルのペアは替え、第3時と同様に行う。今度は、相手の話の要点や思いの聞き取り方、また、さらに深める質問の仕方を見付け、その効果を考える。

- (→聞くのは意外に難しい。内面を聞き出すにはどうしたらいいのだろう…) →
- ③聞き方のコツをモデルから見付け、効果を考える(→分かった。実際に使ってみよう) →
- ④意識的に活用して再挑戦する(→これはできたが課題が残る) →
- ⑤学習を振り返る(→これからこうしたい) →
- ⑥実生活で活用していく

また、対話を実践する際には、モデルも含め、相手に心から聞きたい話題で行わせる。21世紀型能力は、学んだことを実生活でどう使うかまで求めている。こうした生徒の課題意識に沿った学習過程が「分かる」から「できる」へと少しずつ生徒を導く道程となる。

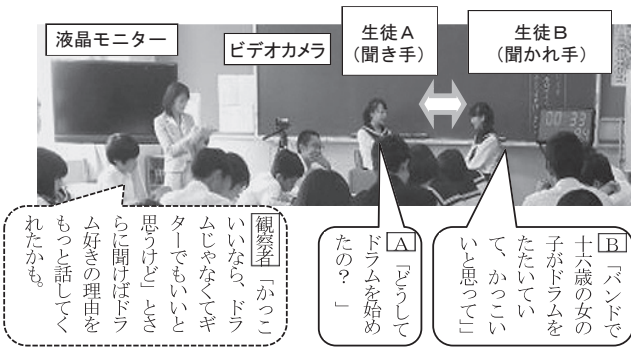
(2) 目の前の対話を対象化し聞き手側から観察を行う

「メタ認知」は言わば自分を対象化した認知である。そこで本単元では、生の対話を何度も観察させた。まずは、第2時の初挑戦の段階での観察である。自分の対話前の観察では、友達と教員との対話を漠然と見聞きする程度だった生徒も、自分の対話後の観察では、「聞き手」の立場に立ち、自分と比べながら批評的に観察を行っていた。自分の対話についても「観察されている」という状況がメタ的な意識の土壌を作ったと考えられる。その後で、行った対話とその瞬間に働いた自分のアタマやココロの中をスローで想起させ、じっくり文字化させた。これは聞き手としての自分のありようを客観的に自覚することを促した。

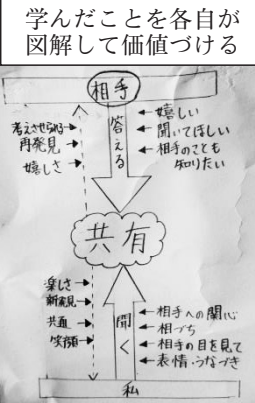
さらに、第3・4時には、目の前で刻々と展開する友達同士の対話を観察させ、聞き方のコツを見だし効果を考えさせた。その際のポイントは以下の3点である。

① 実の目的をもったその場での対話を観察させたこと。

観察対象である生徒Aには、心から聞いてみたい相手を選ばせ、事前の打ち合わせや練習を一切せずにその場で対話させた。そして、和やかさも堅さも含めその場の雰囲気共有しながら緊張感をもって観察させた。場面に適応した瞬発的な思考・判断・表現は、対話の特性である。もちろん授業者にとってその場での



**第5時** 学習したコツを活用して下級生の個性を引き出す対話を行う。また、本単元での学びを図解し、感想を書き留める。



**4 実践に対する振り返り**  
(1) 生徒の課題意識や願いに沿った学習過程を仕組む

本単元では、一貫して「聞き方」に焦点化しつつ、次のように学習活動を展開した。

- ①番組を視聴し学習活動に見通しをもつ(→できそう、やってみたい) →
- ②対話に挑戦する

教材研究は難しい。それでも、その場で行う生の対話を教材にする価値は高いと実感する。

② 一貫して「聞き手」の立場から観察させたこと。

観察前には、聞き手モデルである生徒Aが観察者に対し、生徒Bの何に興味があるのかを知らせるようにした。そのため、観察者も「その受け止めはいい。」「私ならここでこんな質問をする」等、聞き手に同化して考えることができた。

③ 表面的な言語表現だけでなく、「聞き手」のアタマの中で行われた思考・判断やココロの動き、そしてその効果を推測させたこと。

刻々と展開する対話だが、録画さえしておけば「ここぞ」と思う場面をストップモーションで分析することができる。また、対話した本人たちもそれを見ることで、メタ的に自分を振り返ることができた。

なお、「内面発掘型」の対話を通じたこの学習は「思考力」の育成だけでなく、次の感想にあるように、学習者の人間関係づくりや自己肯定感の醸成を促した。

今までは、黙って目を見て聞いていればいいと思っていました。でも一瞬一瞬いろいろたくさん考えて、少しの時間なのに頭はフル回転で疲れを感じるほどでした。聞くことは考えることなんだと思いました。

自分からは話さないようなことを聞いてもらったのは本当にうれしかったし、その人しか答えられない気持ちを聞かせてもらうのは「へえ」って思うことばかりで、お互いに分かり合えた気がします。